

保育活動に困難を示す発達障害幼児に対する保育支援方法の検討

稲田 京愛

I. 問題

1990年、保育所保育指針に初めて「障害児保育」の項目が記載され、保育者と専門機関との連携を明らかにすることが当面の課題となっていた(園山, 1994; 由岐中・園山, 1999)。しかし、発達障害幼児に対する機会が少ない巡回相談や研修体制では限界があり、保育者と専門機関との詳細な情報交換は難しいことから、連携を確立するための具体的な方法が求められている(園山, 1994; 由岐中・園山, 1999; 平澤・藤原, 2001)。そこで、保育者のニーズと保育所の実状に沿って、機能的アセスメントに基づく支援計画の立案(0' Neill ら, 1997)の観点に基づいて、保育者にとって実行可能な支援計画の立案方法について検討を行った研究(庄司, 2003)がある。

庄司(2003)は、アセスメント段階で、保育者のニーズの把握及び抽出を行った。その結果、対象児の支援ニーズが挙がり、保育者本人の希望や意見を伝達することができたが、記入方法が基本的に自由記述であったため、内容が漠然としすぎ、担任保育士が問題やニーズを絞り込むのに時間を要したことが課題として挙げられた。

また、保育所での対象児の様子を把握するために、保育に関するアセスメントを行った。その結果、保育者が意識しなかったニーズを掘り起こすことにつながったが、保育所の体制、保育者の体制、一日の保育活動の実態等の保育所の体制的な情報を得る質問項目の改良が示唆された。

従って、統合保育場面において支援を行う場合、立案された支援計画が保育所とクラスの体制、対象児、保育者の実状に適合していること、更に保育者にとって実行可能な支援計画であるという観点から、支援の立案条件をいかに特定するのかについて

の更なる検討が今後の課題であると考えられる。

II. 目的

本研究では、保育活動に困難を示す発達障害幼児に対する支援方法について、以下の点から検討を行った。

- (1) 保育者における保育支援方法の適合性についての検討。
- (2) 本研究で用いたニーズの把握及び抽出方法の効果についての検討。

III. 方法

1. 研究者の位置づけ

情報収集及び、支援計画の立案者。

2. 研究の参加者

①対象児の担任保育士3名。②対象児：A児：年長クラスに在籍する5歳の高機能自閉症の男児。B児：年中クラスに在籍する4歳の女児。アスペルガー症候群の疑いがある。C児：年少クラスに在籍する3歳の男児。知的障害の疑いがある。

3. 支援の手続き

支援の全般的な手続きは図1に示したとおりであった。

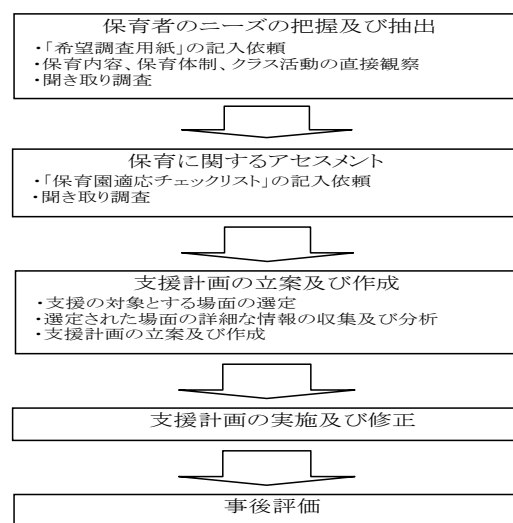


図1 支援計画の全般的な手続き

1) 保育者のニーズの把握と抽出

庄司(2003)を参考に「希望調査用紙」を作成し、各担任保育士への記入依頼と聞き取り調査を行った。具体的には質問項目を日常の保育プログラムに沿って、記入場面を更に具体的な活動項目ごとに分けた。その結果、対象児個々への支援を必要とする場面が挙げられた。また、直接観察を行い、保育所の体制、保育者の体制、一日の保育活動の実態等の保育所の体制についての情報を得た。

2) 事前アセスメント

庄司(2003)を参考に「保育園適応チェックリスト」を作成し、各担任保育士への記入依頼と聞き取り調査を行った。その結果、A児は、ほぼ保育所に適応していたが、給食の準備・片付け場面で一連の動作活動ができず、逸脱行動が多く見られた。B児、C児は多くの場面で、担任保育士や介助員の支援を要し、逸脱行動が多く観察された。

3) 支援計画の立案及び作成

1)、2)の結果に基づき担任保育士と協議を行い、支援場面を選定した。選定された場面の詳細な情報収集から、技能の有無に関する課題分析を行い、課題項目ごとに対応して、支援仮説及び支援方針を作成し、担任保育士と協議を行い、最終的な実行案と具体的な手続きを決定した。

4) 支援計画の実施及び修正

立案された支援計画をそれぞれの担任保育士に実施を依頼した。また、実行中の対象児の変容や実施結果に合わせて随時支援計画の修正を行った。

5) 事後評価

支援計画の立案及び実施の過程について、有効性及び妥当性の観点から、担任保育士へのアンケート調査を行った。

表1 給食片付け場面における実行プログラムの実施結果①(A児)

課題項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
1 かばんを机の上に置く																
2 お弁当袋をかばんから出す																
3 袋口を広げる																
4 お弁当箱にハンドをつける																
5 お弁当箱を袋に入れる																
6 箸を箸箱に入れる																
7 箸箱をお弁当袋に入れる																
8 手拭タオルを入れる袋を出す																
9 手拭タオルを袋に入れる																
10 袋をお弁当袋に入れる																
11 コップをお弁当袋に入れる																
12 歯ブラシをお弁当袋から出す																
13 歯ブラシを持って砂時計の所にいく																
14 右手の親指を歯ブラシの腹に当てて持つ																
15 左下の歯を奥から手首を手前に引くように磨く																
16 手首をひねって右下の歯を奥から手前に引くように磨く																
17 右手の親指を歯ブラシの背の立てて持つ																
18 左上の歯を奥から手首を手前に引くようにして磨く																
19 手首をひねって右上の歯を奥から手前に引くようにして磨く																
20 「イー」形を作る(口)																
21 右手の親指を歯ブラシの横腹下に当てて持つ																
22 右手のひじを上げて前腕を水平にする																
23 右手のひじを上げて前腕を水平にして前歯を磨く																
24 うがいをする																
25 席にもとる																
26 歯ブラシをお弁当袋に入れる																
27 お弁当袋をかばんに入れる																
28 かばんをロッカにしまう																

■ 自発 □ 声かけ □ 声かけ以外の援助 □ 機会なし

表2 手洗い場面における実行プログラムの実施結果(B児)

課題項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
タイマーを取る																								
教室を出る																								
洗面台に向かう																								
洗面台の前に立つ																								
タイマーをホワイトボードに貼る																								
数字(1)を押す																								
スタートボタンを押す																								
蛇口をひねる																								
石鹸をつける																								
手を洗う																								
泡を流す																								
蛇口を止める																								
タイマーを止める																								
手拭タオルの場所に行く																								
手を拭く																								
洗面台にもとる																								
タイマーを取る																								
教室へ向かう																								
教室へ入る																								
タイマーを籠に入れる																								

■ 自発 □ 声かけ □ 声かけと援助 □ 声かけ以外の援助 □ 通行なし

表3 お昼寝準備場面における実行プログラムの実施結果(D児)

活動項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
1 履きかばんを取りに掛かへく																									
2 かばんを取る																									
3 所定場所まで行く																									
4 所定場所の履きかばんを置く																									
5 お昼寝用道具を出す																									
6 敷きタオルを置く																									
7 掛かタオルを置く																									
8 履きかばんをマフリンに置く																									
9 マフリンを置く																									
10 廊下にもとる																									

■ 自発 □ 声かけ □ 声かけ以外の援助 □ 機会なし

IV. 結果

1) 対象児の変容

A 児は、給食片付け場面で介入を境に自発的に取り組む活動項目が徐々に見られ始め、セッションを重ねることによって、一貫して自発的な遂行が見られるようになった。歯磨き場面も徐々に自発的な取り組みが増加し、他の園児と同じ時間内に活動を行うことが多くなった(表1)。

B 児は、給食準備・片付け場面で介入を境に自発的に取り組む活動項目が多く見られた。セッションを重ねることによって、前の活動が次の活動の手掛りとなって連続して活動を進めることができた。特に、手洗い場面では、介入を境に何度も手を繰り返し洗う行動は激減し、他の園児と同じ時間内に活動することが可能となった(表2)。

C 児は、全部の支援場面で介入を境に自発的に取り組む活動項目が見られた。セッションを重ねることによって、前の活動が次の活動の手掛りとなって連続して活動を進めることができた。また、多くの活動項目において、自発的な取り組みの増加傾向が認められた(表3)。

2) 保育士の支援手続きの実行と対応の変化

3 事例において、実行者である保育士は、ほぼ支援手続きどおりに実行しており、介入初期は対象児のそばで促しをしていたが、後半からは、対象児から離れて様子に合わせて必要な部分のみを援助するといった、必要最小限の援助が可能となった。また、活動機会と技能の有無の整理結果に基づいて支援方針を立案したことによって、支援が必要な部分と必要でない部分が明確となり、一貫した対応が可能となり、全体としては、問題なく活動を進めることができた(表4)。

表1 お昼準備場面における保育士の実行度(月)

活動項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26(セゾン)
1 居敷が私を取りに誘う																										
2 かばを切る																										
3 所定手順で																										
4 所定手順でかばを切る																										
5 お昼準備の道具を出す																										
6 歯磨きかば																										
7 掛かかば																										
8 居敷が私をマフの口へ																										
9 マフを置く																										
10 席をどる																										

■ : 1分以内
 ■ : 声かけする
 ■ : 手洗い
 ■ : 機嫌よく

V. 考察

保育場面に困難を示す発達障害幼児に対する保育支援方法において、事例Ⅰから事例Ⅲまでの結果から、立案された支援計画の有効性及び妥当性が示された。保育者における支援方法の適合性の観点からは、支援計画は実行しやすく、クラスの体制的にも無理なく取り組み、また対象児の実態に沿った支援計画であり、保育者の実行度にほぼ適合していたことが示された。

保育活動に困難を示す発達障害幼児に対する実行可能な支援計画を立案するために、「希望調査用紙」の記入と直接観察、聞き取り調査を用いて保育者におけるニーズの抽出及び把握調査を行った。結果から本研究で用いた情報収集方法は、情報交換を根拠とした専門機関との連携を図る上で有効であったと考える。

また、アセスメント過程は、保育者のニーズを掘り起こす上で重要であることが示された。更に、支援方針を立案し、実行可能な支援計画にするためには、保育活動に困難を示す発達障害幼児に対する保育支援方法の先行条件をアセスメントすることが重要であることが示唆された。

文献

庄司香織(2003)統合保育場面における保育者のニーズと実状に適合した支援検討. 上越教育大学平成14年度修士論文.